

紫苑。

紫園涼

バス停、小屋の中。



僕の耳の奥からは、一年中雨が降り続けている。

本を読んでも出かけていても家でコーヒーを飲んでいても、いつも変わらずぽつん、ぽつん、と規則正しい音が響く。

なんだか雨の匂いまでしてくるようだから不思議だ。共感覚ってこういうことをいうのかもしれない。

「庵(いおり)くん」

田舎町の古いバス停。

仕方なく添えつけられたような小屋のトタン屋根からは雨漏りが激しい。

雨の中、凜としたその声が僕の名前を呼ぶ。

「また、そんなところにいるのね」

彼女が笑う。セーラー服がふわりと風に揺れた。僕は顔をあげない。

「風邪、ひいちゃうよ」

屋根の中は二人で入るにしては狭い。肩と肩が触れ合う。

雨に濡れて香り立つ彼女の髪の毛の匂い——金木犀の香り。

「ねえ、何か言って」

それでも僕は答えない。

靴の濡れたつま先をじっと見つめ、雨の音を聴くだけだ。

そうしていると、いくらか心が休まる気がするから。

あの日もあめ。



思えばあの日も雨だった。

土まじりの雨水が流れて側溝の中に流れ落ちていく。
東京から越してきたばかりで不慣れな土地に悪戦苦闘。
通学路が山道だなんて僕の青春もいよいよおざなりだと思う。

「――いいじゃない、そんなことどうだって！」
たんと降り続く雨音の中にひとつ、声が響いた。よく通るはっきりとした高い声だった。

「だいたいアユムは口うるさすぎるのよ」
「おまえが勝手すぎるんだよ」
「そんなことない、アユム、……変わったよね」
「……人のこと、言えないだろ」

顔をあげた先には赤い色がちらついていた、傘だった。
大きいとはけして言えない傘が乱れて、二人の姿を覆っている。
クラスメイトのアユムは彼女の腕を引いて必死にその中へとどめようとするけれど、彼女は濡れるのも気にしないでその手を振り払い、坂道を走って下って行った。
ち、と舌打ちしたアユムが彼女を目で追いかけたあと、くるりと赤い傘を反転させてこちらを向いた。
僕はどこか冷めた目で二人を傍観していたことに気づき、ふと我に返る。

「よ、」
歪んでいた表情は僕に気づいたとたんに笑顔に変わる。アユムがこちらに手を振っている。
整ったその顔立ちも、人気者と称されるにふさわしい張り付けたような笑顔も、僕は苦手だ。
二度瞬きをして軽く肯くことで返事の代わりにする。アユムは僕に話しかけてきたただ一人のクラスメイトだ。だから覚えていた。
ただ、それだけのことだ。

アユムという男。



歩(アユム)という男は不思議なやつだった。

いっけん誰からも好かれるムードメーカーのようにみえて、ふとした表情に剣呑さを感じさせた――どこを見ているのか解らない、無表情でひたすら虚無にみちた目。

それに気づいているのは僕だけなのか、それともみんなも気づいているけれどあえて黙っているのか、転校してきたばかりの僕にはわからない。

だけど僕のそんな妄想じみた邪推を的中させる出来事があの日起こった。

そこでどうして気づけなかったのかと、僕はいまでも思うことがある。

「人間ってさ、死んだらどうなるかな」

その日は偶然アユムと日直当番だった。

アユムは職員室に日誌を置いてきたあとでまだ教室に残っていた僕をみて、唐突にそう訊いた。

「さあ、どうだろうね」

なんとなく居心地が悪くて無難に返事を返して鞆を持った。

けれどアユムは食い下がるように僕に詰め寄って、こう言った。

「なあ、おまえ、死にたくないか？」

アユムはにやりと薄く笑った。

僕が答えないでいると彼はさらに畳みかけるようにつづけた。

「死にたいと思ったこと、あるよな？」

どうして断定できるのか、それともそれはある種の希望なのかもしれないと僕は考えた。だからとりあえず「どうして？」と訊いてみた。

「だってさ、俺も死にたいからさ、わかるんだよ」

その声は“いつも”より低く、僕はこっちが彼の本当なんだろうなとぼんやり考えた。

どうして僕にだけ見せるのか、もっとも僕にだけ、なのかどうか定かではないけれど。それでもアユムに興味があるわけでもなければ、選ばれて嬉しいわけでもないから正直面倒だなと思った

。

「わかるって、何が？」

「死にたいやつのが」

「そう」

「だからさ、」

アユムはそこで一拍置いてから、たっぷりと間をあけて僕の肩に手をおいた。

「だからさ、俺が先かおまえが先か、決めるのはおまえ次第だと思うね」

満足そうにそれだけ告げると、アユムは軽い足取りで教室をでていった。

その後ろ姿までが僕を嗤っているような気がした。

雨の似合う彼女。



昔から無感情だね、と人に云われることが多かった。

母親が亡くなり、叔母に養子として育てられたせいで身内に遠慮する癖が物心ついたときからあったせいかもしれない、でもそうじゃないかもしれない。

僕は別に感情がないわけじゃない。子犬を見れば情緒も湧くし、綺麗なものを見れば心も動く。だけど残酷なことには鈍感だと言われてもその実否めない。

母親の自殺現場の第一発見者という知らない肩書きをさずかったのが早くも六歳のときだった。それからは血であれ死体であれ何とも思わなくなった。何も感じなくなったというのが正しい。中学の読書感想文で入賞した。課題はカミュの「異邦人」だった。

「そんなに文章が書けるなら、もっと話したらいいのに」クラスメイトの女の子にそんなことを言われた。だけど今ではその子の顔も名前も思い出せない。

だけどアユムの言うように死にたいと強く思ったことはない。ただ、生きたいかと訊かれれば答えに窮する。

「なにしてんの、そんなところで。バス、来ないよ？」

彼女が初めて声をかけてきたのはこっちに来て三日目の夕方だった。

バス停のベンチに座る僕をのぞきこむように、手を後ろに組んで。

「二時間に一本しか来ないの、しってる？」

「ああ、しってるよ」

「じゃあどうしてそんなところで座ってるの？」

「ここが落ち着くからだよ」

「じゃあ、私も座っていい？」

にっこり口角をあげて笑った彼女は儚げでふわふわしていて、そこに居るのかどうかもあやふやなくらい透き通っていた。綺麗な子だと思った。長い黒髪と白磁の肌が造り物みたいだ。

「私ね、ミナっていうの。キミは志井庵(しいおり)くんでしょ。転校してきた有名人」

「そんなんじゃないよ」

「ううん、転校生なんてめずらしいもん。有名なんだよ、庵くん」

僕はよく喋るミナの声に聞き覚えがある気がして頭の中をひっくりかえす——そして見つかった。昨日アユムと一緒に居た女の子だ。

「昨日、」

僕はそこまで言って迷った。あまり人に見られたい場面だったようには思えなかったし、彼女はきっと僕に気づいてさえいなかっただろうから。

「あ、昨日のはね、なんでもないの。忘れてよ」

予想外にミナは何のことかわかったような言い方をした。あの赤い傘はきっと彼女のものなのだろう。

「ね、さっきからなに聴いてるの？」

僕は片方のイヤホンをミナに渡す。彼女は嬉しそうにそれを右耳に差し込んで目を瞑った。雨音——それはこの世界でたったひとつ、僕が僕を保てる音だ。静かで単調で、余計な煩悩を一切消し去ってくれる。雨がいつだって傍で味方をしてくれているような気になる。

「雨ね」

「うん」

「こんなの聴いて、おもしろい？」

「そうだね、よく寝られるようになったよ」

「ねえ、私の名前どうしてミナなのかわかる？」

「さあ、どうだろう」

「私ね、6月に生まれたの。雨降りの日でね、それで水無月のミナ」

「へえ、そう」

名前の由来をなんだか凄いことのようにもったいぶって話すミナ。僕の気合いの入っているとは言い難い相槌ちのせいで気を悪くしたのか、ミナが頬を膨らませた。

「キミ、どうしてさっきから笑わないの？」

雨の匂いがした。それは耳の音のせいなのか、ミナのせいなのか——いや、単純にもうすぐ降るのかもしれない。

ミナが何を言いたいのかはわかる。それはみんながみんないつも僕に求めること、笑ったり泣いたり驚いたり怒ったりすることだ。痛いほどわかる。

ミナは僕の反応をうかがってじっとこっちを見つめたあと、諦めたように息を吐いた。

次に何を言われるのかだいたい予想がついた。つまらない、とか面白くない、とか。きっとそうだ。

「じゃあね、庵くん、キミは自分の名前の意味しってる？」

「え？」

あんまり予測しないところから放り込まれた問いかけに思わず訊きかえす。ミナは得意げに微笑んで、僕の空いたほうの耳に囁いた。

「あのね、小さな小屋、っていう意味なの。ちょうどこの屋根の下みたいなね」

その狭間で、揺れていた。



誰が知る、この世の生は死にほかならず、死こそ、げに生ならずや。

三大悲劇家の一人、エウリピデスが「断片」に残したフレーズだ。

死が生でないと、生が死でないといったい誰が知るといのか——そんな意味だと思う。僕はこの言葉に少なからず共鳴している。そもそも生死の境目は曖昧なのだ。人は生きた瞬間に死んでいるし、死んだときに生きるともいえる。ずっと死んでいるとも生きていても言い難い。要は、その瞬間のみにだけ意味を持つ。ふつうはどう考えるのか知らないけれど、僕はこう考えている。そもそも表裏一体という言葉があるくらいだ。それくらい世の中は矛盾で満ちている。ミナとしたこんな会話を僕はよく覚えている。学校の裏の倉庫で僕がちょくちょく授業をさぼっていると決まってミナが現れた。まるで図ったようなタイミングで。

「どうして煙草を吸うの？」

「さあ、どうしてかな」

「美味しいの？」

「不味くはないよ」

「アユムに死にたいって言った？」

「言ってない」

「自殺ってどう思う？」

「そうだね、」

最後の質問には上手く答えられなかった。僕の中でどこかぼっかり空いた空間のようなものがあって、そこにだけは回答や決着なんてものとは縁遠いもやもやした塊があったからだ。

「でもね、死ぬのも生きるのもそうたいして変わらないんじゃないかな」

つかのまの動揺を悟られないように紫煙をはきだしながら答えた。苦し紛れというわけじゃない、けして。

「そうね、そうかも。だって庵くんはいま、ある意味じゃジサツしてるのも同じだもんね」

「ああ、たしかに」

「一本で五分ぶんだけ、ジサツしてるのよ」

「そうだね」

「それにわたしはいま生きてるけど、死んでるとも言えるものね」

そう、僕が言いたかったことはそれだ。つまりはそういうことだ。

だから自殺なんかしなくても、いや仮にしたとしても同じことだ。それなのにどうしてあのとき母はそんな無意味なことをしたんだろう。

「それ、どうしたの」

「ん、あのね、転んじやったの」

ミナの右足に巻かれた包帯を見遣って尋ねると、彼女は天井に立ち上る紫煙を眺めながらなんとはなしに言った。

それ以上訊く意味も理由もなかったので僕は黙った。

「ね、一口ちょうだい」

「やめとけば」

「どうして」

「なんとなく」

ぽつ、ぽつ、と天井に打ち付ける雨音がやけに大きく鮮明に響いた。今日はイヤホンをしていないのに。

彼女の唇が触れていたものの数秒だけ、脳裏にがんがんとうるさいくらい雨が鳴っていた。

「ふうん、やっぱり苦いね」

ぺろりと口端をなめたミナは飄々としていた。罪悪感も羞恥心も何もかも捨て置いたような言い方だった。

「庵くんが素直にしてくれないからわるいんだよ」

それが彼女なりの、精一杯の強がりとSOSだったとどうして気づいてあげられなかったのだろう。

僕はミナの言葉をそのとおりに受け取って、ただアユムに知られたら面倒だな、なんて呑気なことを考えていたのだ。

ミナはその日を境に何度も僕の“すっぽかし”に付き合った。倉庫にいても、バス停にいてもどうしてか彼女は容易く僕を見つけることができた。

「どうしてこんなことしてるの」と訊いたことがある。正確にはどうして僕なんかと、という意味だ。けれど僕は実際彼女がアユムと付き合っているのかどうかさえ知らない。

「庵くんは雨が好きでしょ」と彼女は答えた。だから雨の降る日は一緒に空を眺め、入道雲を目で追った。晴れた日には倉庫にこもって二人でイヤホンを耳にあてた。

――ミナも僕も雨だらけだった。

10年前、夏。



「どうしたの、顔」

「ああ、これね……なんでもないの」

当時29かそこらだった母は記憶にある限り美しい人だった。とはいえそれ以外に形容しがたいというだけで今ではその顔もぼんやりとしか思い出せない。父方の叔母の家に母の写真があるはずもない。

「おまえは俺の子供じゃねえ」

あの日から僕の顔をみればお決まりのせりふとなった父の言葉。そこに真実が含まれているのかわかからない。けどもしかしたら父は“可哀相な人”なのかもしれない。けど僕にとって母親はこの世で一人だった。それだけは変わらない。僕の顔など見たくもないのだろう、育児放棄なんて生易しい現状まで追い詰められた父は姿をくらました。いつか父親を超えたい、だとか小さい頃の思い出、なんてものは僕には存在しない。あるのはただ、鬱陶しさを隠せていない叔母の愛想笑いだけ。

僕が誰の子供なのか、それはいまだに解らない。父がどうして母をあそこまで追い詰めたのか、わからない——そういうことだ。

「私、これでもヴァイオリン弾けるのよ」

ミナは相変わらず何がおもしろいのか僕の横で笑う。アユムの話はしない。それが暗黙のルールだからだ。

「何が弾ける？」

「一番得意なのはね、G線上の Aria」

「あー……しってる」

「そうでしょ、雨の音によく合うと思うよ」

今日もバス停のベンチに座る僕の目の前でその黒光りした楽器を抱えてミナが楽しそうに笑う。

「でも今日は晴れてるよ」

「それでも庵くんの世界はきっと雨」

ミナがしたり顔で僕の耳からイヤホンを抜いた。そしてそこから流れる雨音を聴いて、ほらやっぱりという顔をした。

「弾いてよ」

イヤホンを両耳にはめなおして、目をつむる。

夏の温かい風もどこか涼しくなって、蝉の声が遮断される。

その静謐ともよべる世界の中にミナの声が侵入してくる。それはそれは自然に、当たり前そこに生きる音として。

その名の通りG線上のゆるやかな旋律は僕には悲しく響いた。アリアは愛する者にささげる歌のはずなのに、どうしてか悲痛に満ちている。

ミナは黙って弾き続けた。

あまりにも長い間僕はそれを聴き続け、ふと閉じていた目を開けた。

彼女も目をつむっていた。顎をのせたヴァイオリンの上に、頬からひとつ、夏の太陽に反射した煌めきが落ちた。

紫陽花。



アユムは日中、別段変わったところもなく“アユム”を演じていた。いつも人に囲まれてくだらないことではしゃいでいる彼は、雨だろうが晴れだろうが同じだった。それこそ天気など関係ないのかもしれない。

僕は薄々感じていたアユムの崩壊を、教室の一番後ろの席からぼんやり眺めていた。アユムは一度もこちらに顔をむけることはなく、この間の出来事など微塵も感じさせなかった。本当にそんなことがあったのかどうかさえ疑わしかった。クラスメイトの女子のこと、漫画の話、音楽の話、耳をそばだてて聞いていても興じているのはそんな話題ばかりで、ミナのはまったくあがらなかった。彼とミナの関係を知っているのはひょっとしたら、僕だけなんじゃないだろうかとも思った。

だけどひとつ云えるのは、アユムが死にたがっているなんて事実を知ってる人間はきっと、この教室には僕と彼以外に存在しないということだ。

「チューリップの花言葉を知っていますか？永遠の愛、って意味なんです。素敵だと思いませんか？」

いい意味でも悪い意味でも頭の中がお花畑、という感じの国語教師の名前はたしか、佐倉だった。

授業の内容など耳を通り越して、僕は窓の外を見遣りながらそこに張り付いて垂れていく雨水に、ミナのARIAを思い出してリピートさせていた。

「荻野(おぎの)くんは、何か花言葉、知っていますか？」

荻野というのがアユムの苗字だ。佐倉は失望という単語を知らないような笑顔で彼に問う。

「花言葉？先生の言ったチューリップ、俺は嫌いですよ」

「どうして？」

「色が好きじゃない」

「色……？そう、」

「だったら先生、ドクニンジンの花言葉知ってますか？」

普段あてられても適当に流すはずのアユムの饒舌さにクラスメイトがざわめいた。佐倉はたじろいで苦笑いをしている。僕は窓から視線をアユムに流して、成行きを見守った。

「ドク、ニンジン……？さあ、知らないわねえ」

「死をも恐れぬ愛、ですよ。チューリップなんかよりよっぽど永遠を感じませんか？」
なんてな、最後のその一言で佐倉を担いだんだとわかったクラスメイト達は一転、安堵の笑い声をあげる。佐倉は咳払いをしてから「もう、ふざけないでください」と可愛らしい叱責。けど僕はアユムから目が離せなくなった。面白そうに笑うアユムから、金木犀の香りがしたような気がして。

パンドラ、金木犀。



「どうして授業にでないの？」

僕はその日、パンドラの箱、なんて仰々しいまではいかなくとも、それでもきっとそれに近い質問をした。ミナの席はいつだって空いたままだった。それなのに彼女は不登校というわけでもなくセーラー服を着ていたし、僕がさぼっているのにも付き合った。

「どうしてそんなこと訊くの？」

ミナはつまらなさそうに一本調子で訊きかえす。なんだか顔色が悪かった。それになんとかく痩せたようにみえた。

「あのさ、キミの家に金木犀ある？」

それ以上その話題をつづけるのも気がひけて、僕はずっと気になっていたことを訊いた。ミナは驚いたように僕のほうを見て、目をしばたたかせた。

「ないわよ、どうして？」

「ううん、なんでもない」

僕はミナの着ている薄手のカーディガンに気づいた。今日は6月とはいえ、徐々に本格的な夏が顔を見せ始めている。梅雨と夏の始まりが僕は嫌いだ。だけど彼女の誕生日はいつなのだろう、そういえば日にちを聞いていない。いつまで経っても帰ってこない母を待って置き去りにされたあのバス停を思い出す。もうすぐあの日が巡ってくる。

暑くないの、と一応気遣うようなフリをして訊いたけれど、ミナは全然、と答えた。それならそれでいいと思ってしまう僕はきっと、卑怯で冷たい人間なのだ。

「紫陽花」

倉庫の半開きになった扉からのぞいていたそれにミナが声をあげる。ミナの好きな薄紫色の花びらがこっちを向いて佇んでいた。

「私、紫陽花好き」

「そう」

「色が好き」

「でも毒があるんだよ」

「そうなの？」

「そうだよ」

紫陽花のは毒性がある。あんなに悪意のない花にも、相応の毒は存在する。ちょうどそれは綺麗な女の子みたいに。

「じゃあ、食べたら死ぬの？」

「死にはしないよ。吐いたりふらふらしたり、そういったこと」

「なんか、麻薬みたいね」

ふうん、なんて感慨深げに肯いて、ミナは遠くから恋い焦がれるみたいに紫陽花を眺めていた。

「あ、」

ミナが思い出したような声をあげた。

「そういえば、アユムの住んでる家のほう、お母さんの香水が、金木犀だった」

ミナの言葉はそこだけ浮いたように行き場をなくして僕らの間に漂った。

僕の吐き出す紫煙に紛れて、いつまでも宙に浮かんでいた。

勿忘草。



僕がいつもの通り倉庫の扉を開けると、一番に目に飛び込んできたのは体育用具でも散らかったボールでもかび臭いマットでもなかった。

鮮烈な赤色と薄紫、それから一一横たわるミナだった。

「……」

僕はそれをじっと見つめ、所在なく立ち尽くしたあとゆっくりとその傍らに座った。

彼女の長い髪を撫でる、つややかなそれはやっぱり金木犀の香りがした。

放り投げられたヴァイオリンが主人を失くして寂しげだった。無性にアリアが聴きたくなくて、僕はそれを拾い上げると、授業中だっていうのに構わずそれを弾いた。ミナの奏でる音とはだいぶ違っていた。ああ、僕は永遠にアリアを聴けないのか、と思った。

イヤホンをしなくても今日は雨音がひっきりなしに響いている。いつだって僕を柔らかく包み込んでくれていたそれは、何かを責め立てるような強く激しい音に変わっていた。悪意に満ちていた。

僕はそっと彼女のカーディガンの袖をまくってみる。思った通り、そこには紫色の斑点がいくつも踊っていた。

不思議と悲しみは襲ってこない。誰かの死を目の当りにするのはこれが二度目だからかもしれない。一度目で僕はそのすべての感情を、使い切ってしまったのだ。

“だからさ、俺が先かおまえが先か、決めるのはおまえ次第だと思うね”

アユムの下卑た笑い声が聞こえて、ミナの笑顔が霞んでいった。

紫苑。



「ねえ、何か言ってよ」

それでも僕は黙っている。どんよりとした入道雲も、靴や服を濡らす雨も、イヤホンから流れ込む音も、すべてがかつての輝きを失っていた。

「どうしてあんなことしたの」

その声は責めているようでもなく、深い海の底から浮かんできたような優しい声だった。

「ねえ、何か言ってよ」

それでも僕は黙っている。アユムを殺したのは僕だ、ミナは僕を赦さない。絶対に赦さない。いくら僕の横で笑っていても、それだけはわかる。

アユムは最期まで笑っていた、その仮面のような笑顔を脱がなかった。徹底して彼は“アユム”だったのだ。ミナが自分で命を絶ったのか、そうじゃないのかは確かめようがなかった。訊いたところでアユムが僕にそれを教えるはずもない。だから、殺した。

「可哀相な庵くん」

ミナの声が雨音と重なって、一音一音、僕の胸の底に落ちていく。初めて、僕は泣いた。10年前だって、泣いたりはしなかったのに。

「ありがとう、大好きだったのよ」

はっとして顔をあげて隣に顔を向けた。ぶつかっていたはずの肩の温もりも、金木犀の香りも消えていた。

ただそこに存在するのは10年間変わらない雨の音とまとわりつく夏の湿気。ひぐらしの鳴く声。

そして。

僕の隣にぽつんと置かれていた薄紫色の花は皮肉にも紫陽花と同じ色――勿忘草(わすれなぐさ)。“私を忘れないで”花言葉が頭をかけめぐる。ミナの最期の言葉がそのソプラノの声が、聴こえた。

荻野 水奈――ぼくはきっとその名前を忘れない。